

ステーキにわが名残します シャトーブリアン命名秘話

ひと口に「歴史に名を残す」といっても、ちよつと出来そうで、そうでもないのが「料理に自分の名を張りつける」こと。たとえば、ジンギスカン鍋だの、東坂肉（トンポーロー）といったたぐいである。

もつとも、ステーキひとつをとつても「ザーロイン」「ジャトーブリアン」「ジャリアピン」「藤原ステーキ」「ロッシーニ風」など結構多く、事と次第によつては「あなたも？」といえなくもないのがこの世界である。

たとえば、「ザーロインかシャトーブリアンか」と、ステーキ党を二分するシャトーブリアン。

これがフランス浪漫派の作家で「アタラ」や「ルネ」などの甘美小説を書いた男のペンネームと知っている人はかなりの文学通。

彼はいちはやく自分の未来について予感したのか、おのれの愛するステーキに自分の名前をかぶせておくことを忘れなかったのである。

シャトーブリアンは、作家としてはともかく、美食家として知られたお人で、彼のお抱え料理人モンミレイユは、肉についてはパリでも指折りの権威といわれていた。



そのモンミレイユが、主人の信愛を得るために考え出したのがフィレ肉の真ん中の柔らかくて分厚い部分を使ったステーキで、このステーキがすっかりお気に召したシャトーブリアン、一日に二度も「おのれの名」をかみしめていたとい

う伝説まで残されている。

一方「ザーロインかシャトーブリアンか」のザーロインの方は、英国はキング・ジェイムズ一世の御世、ある宴席で、王の食卓にのぼった肉がことのほかうまかったので、王が「これはうまい、何という肉か？」とお尋ねになると「はい、牛の腰（ロイン）のところでございます」とその家のあるじの答え。

すると王は、さつと佩剣を抜いて「見事な肉だ。ほめてもらせよう」と仰せられたので、あるじは自分が褒美でももらえるものと感違いをしてひざまずくと、王はテーブルの上の腰肉（ロイン）に剣を当て「汝に「卿（サー）を与える」とのたもった、という故事来歴がついている。